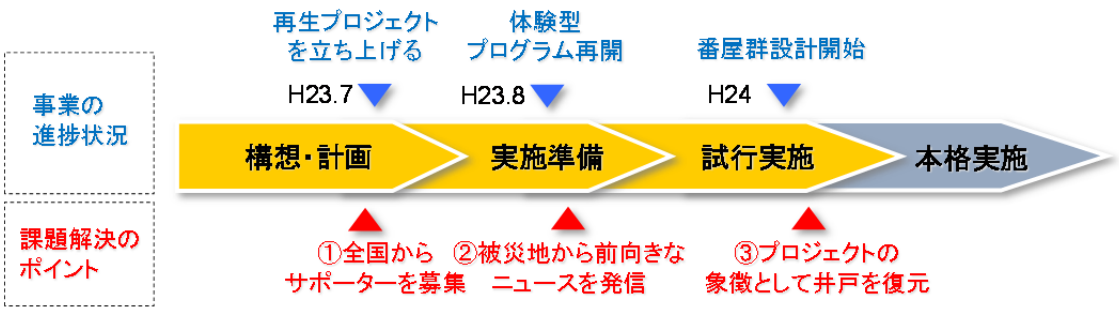
事例1-6　　机浜（つくえはま）番屋群再生プロジェクト（岩手県田野畑村）

1 番屋群再生プロジェクトを立ち上げ、全国からサポーターを募集
2 いち早く体験型プログラムを再開し、被災地からの前向きなニュースとして発信
3 番屋群再建に先駆け、津波で埋まった井戸をサポーターとともに復元

事業の全体工程と現況



事業主体	田野畑村、ＮＰＯ法人体験村・たのはたネットワーク
プロジェクト規模	再建築予定の番屋　23棟
事業費	サポーター支援金約230万円、 農山漁村活性化プロジェクト支援事業　２億5,600万円ほか

(1)事業の概要

震災前の机浜番屋群

岩手県沿岸北部に位置する田野畑村は、ワカメやコンブの養殖を中心とする水産業と酪農を主産業とする静かな村だ。北山崎や鵜の巣断崖などの景勝地を抱えることから、県外から訪れる観光客も少なくないが、多くは展望台からの眺めを楽しむだけで、地元住民と交流を持つ機会がない。そこで村は、村内の机浜（つくえはま）に残る番屋（漁師小屋）群を活用した体験型交流観光で村を活性化する事業に着手。平成15年に「体験村・たのはた推進協議会」を結成し、地元漁師ら住民の協力を要請するとともに、体験型プログラムの構築に取り組む。平成18年には水産庁の「未来に残したい漁業漁村歴史文化財産百選」に選定されるなど、徐々に地元の機運も高まった。平成20年、協議会をベースにＮＰＯ法人を設立。番屋を仕事場とする現役の漁師と交流する体験プログラムや、漁師が操るサッパ船[3]に乗って海岸を巡るツアーなどが好評で、サッパ船クルーズだけで年間約4,800人（平成22年度実績）の観光客が訪れる事業へと成長した。震災による津波は、そうした活動の土台となっていた番屋群を、跡形もなく奪い去ったのである。

しかし、番屋群再生に向けた動きは速かった。村長はいち早く「机浜番屋群再生プロジェクト」を発案。これまで田野畑村を訪れ、地元の人々と触れ合い、地域に愛着を持ってくれる人たちに呼びかけ、サポーターとして支援してもらうことを考えた。また、好評だったサッパ船クルーズだけでなく、大津波を語り継ぐ「語り部ガイド」も企画。地元住民への理解・調整を進めながら、復興に向けた前向きなニュースとして「ツアー再開」を発信するタイミングを計った。幸い、番屋群の歴史・文化的価値を評価した(公財)日本ナショナルトラストが、本件取組を「東日本大震災自然・文化遺産復興支援プロジェクトパートナー事業」として採択、支援のための募金活動を開始する。観光事業者として交流のあったＪＲ東日本と(株)ビューカードも、「びゅうカード」会員に向けてポイントによる支援を呼びかけた。

[3] 陸中海岸の漁師が小規模な刺し網漁などに使用する小型の磯舟

さらに復興交付金の活用が可能となったことで、番屋群の再建に関しても具体的な設計に入る。

本格的な建設着手に先駆けた平成25年２月。机浜では津波で埋まった井戸の復元作業が行われた。集まった30人の中には首都圏からの参加者も含まれるなど、プロジェクトを象徴する取り組みとなった。

(2)プロジェクトが直面した課題と解決のポイント

1 番屋群再生プロジェクトを立ち上げ、全国からサポーターを募集

井戸復元作業（平成25年２月）

田野畑ファンと住民、行政が一体となり、村の復興のシンボルとなる新しい番屋群づくりを目指す活動として「机浜番屋群再生プロジェクト」を始動。サポーター登録料として１口１万円を支援してもらうとともに、番屋再建に向けたボランティア活動への参加を呼びかけた（サポーター登録者数94人、支援金約230万円／平成25年３月現在)。平成24年３月には第１回ワークショップを開催。サポーターや地元の漁師など23名が集まり、新たな番屋に求めるもの、番屋のあり方、具体的にどんな番屋をつくりたいか、といったテーマに沿って、熱い議論が交わされた。

2 いち早く体験型プログラムを再開し、被災地からの前向きなニュースとして発信

震災前から人気だった「サッパ船アドベンチャーズ」の再開準備は平成23年５月に整っていた。それを可能にしたのは、体験型交流観光のノウハウを田野畑村で学んだ青森県東通村岩屋漁業協同組合の支援による。田野畑村のサッパ船が津波ですべて失われたことを心配し、漁協が組合員に呼びかけて中古船を確保してくれた。しかし、仮設住宅も整っていない時期に観光を前面に出すことははばかられるため、再開時期については慎重に検討。被災地からの前向きなニュースとして受け入れてもらえる時期を見極めた上で、８月に再開する。一方、震災前から行っていた「津波語り部」については、語り継ぐことの重要性を考えつつも、被災者の心情に配慮し、より慎重な対応を行った。語り部役を買って出てくれた住民に対して、約２カ月間は思いつくままに悲しみや苦しみを吐き出してもらい、被災者の心のケアの一助となるよう配慮しながら、その上で観光プログラムとして提供できる内容の合意点を探った。

3 番屋群再建に先駆け、津波で埋まった井戸をサポーターとともに復元

震災直後、番屋群再生には途方もなく長い道のりがあると思われたが、幸いにも再建に必要な資金は復興交付金を活用できることになった。新しい番屋群は、外観は往時の姿をそのまま復元し、一部をセミナーハウスや塩づくり工房などに活用する方向で設計が進められている。これと並行して、サポーターなどから寄せられた支援金を活用し、津波で埋まってしまった井戸の復元に取り組む。地元漁業関係者、行政、サポーターはもちろん、復興工事のために村に滞在していた作業員たちも参加するなど、プロジェクトの本格始動を象徴するイベントとなった。机浜の番屋群は、再建と再生の両輪で、新しい番屋の姿を体現しつつある。

コラム：自分たちが見たもの、感じたものを、次の世代に語り継ぐ

その時、田野畑村役場政策推進課の渡辺謙克氏は、海岸清掃ボランティアに参加した地元高校生を引率して机浜のすぐ近くにいた。経験したことのない大きな揺れ、浜から潮が引いていく光景を目にして、生徒たちとともに急いで高台へ逃れたという。途方もない恐怖を感じながらも渡辺氏は、その場の状況や自分が感じたことをメモにとり続けた。「とんでもなく辛い体験でしたが、だからこそ語り継ぐことの重要性を感じたんです。それは、被災した場所を巡るだけの安易なプログラムであってはいけない。大切なのは、被災者自身が参加し、一人ひとりが自分で見たこと、感じたことをそのまま伝えることだと思っています」。

平成23年８月からスタートした「大津波語り部＆ガイド」ツアーは好調な滑り出しを見せる。旅行代理店経由の観光客はまだ戻らないが、一般観光客の数は、震災前より増加傾向にあるという。